

週日の説教

金 大烈 神父 2010年3月13日(土)

《六つの牢屋》

人間がよく陥る六つの『牢屋』があります。

一つは『自己陶醉』という牢屋です。“自惚れ”や“ナルシズム”とも言います。

ギリシャ神話にナルキッソスという美少年の話があります。ナルキッソスは、ネメシスという神の罰を受け、他人を愛せなくて自分だけしか愛せなくなります。ある日川に映った自分の顔に心を奪われ、川から離れられなくなり、やせ細って死んでしまいます。このナルキッソスのように、自分だけを愛する、他の全てのものは見降ろしてしまう状態を“ナルシズム”“自己陶醉”と言います。

とにかく『自己陶醉』という牢屋があります。皆様はどうですか。「私は自己陶醉ではない」と思う人もいるかもしれませんが、自分の中に人を見降ろすところが、人を軽んじてしまうところがあればこの牢屋に入っていると考えてもよいのではないのでしょうか。私でもよく陥ります。鏡を見て笑顔をしながら、「いいなあ」と思うことがあります。これは鏡に映される顔だけの話ではありません。人間ならば当然、心や振る舞い、技術、人間的なタレント、いろいろなものに自惚れることがあります。

二番目の牢屋は、『批判』という牢屋です。私たちには、いつも人を責める癖があります。相手の話や振る舞いを見て、相手より先に責めてしまう癖です。この『批判』によく陥るのも私たちの弱さの一つです。

三番目の牢屋は、『絶望』です。何でもないことにがっかりしてしまいます。「私は駄目だ。どうしようもない。」といつも劣等感に陥ってしまい、前向きに考えられなくなります。私たちはそういう面を持っています。特に年をとると、そのような現象がよく現れます。「もう年だから私にはできない。」そういう癖、そういう牢屋に私たちはよく陥ります。これも私たちの弱さの一つではないかと思いません。

そして四番目の牢屋は、『過去志向』です。日本語にはない言葉かもしれませんが、漢字ですから通じると思えます。“いつも過去に縛られてしまうこと”です。いつも、現在の自分ではなく過去の中で生きている人がいます。「昔はこれでよかったのに。」「昔の子どもはよかったが、このごろの子どもは駄目だ。」そういう言い方をする人が結構います。これもお年寄りの癖の一つかもしれません。“昔はよかったが今は駄目。未来は希望がない。”このように、いつも過去に縛られて、過去の中で生きている人々がいます。これも私たちの一つの弱さです。

五番目は『羨望』^{せんぼう}です。“いつもうらやましがること”です。誰かが何かを持つと、自分が持っているもので満足できるはずなのにもかかわらず、その人の持っているものがもっとほしくなります。「自分より高価なものを持っている。」と思い、それによってがっかりしてしまふのです。私たちは、そういうところも持っています。

そして、一番良く陥る牢屋があります。六番目の牢屋『嫉妬』です。“ねたみ”です。人間はよくねたみます。女性に多いと思われるでしょうが、実はそうではありません。男性の嫉妬は女性に絶対負けません。

「人間は、これら六つの牢屋に陥って、自分で自分を殺してしまうことがあります。」そのように書かれた心理学者の本を読んで、“自分に関係ないことは一つもない”と思い、がっかりしてしまいました。私も自惚れるところが結構あります。人を批判し、責めことも結構あります。いろいろな人々の生き方を見て絶望する時もあります。過去に縛られることもあります。うらやましがるところもあります。皆様も同じだと思います。お互いに認めましょう。

しかし、この六つの牢屋から解放されれば、幸せになれると思います。では、解放される方法があるのでしょうか。それは、皆様も持っている信仰です。信仰によって熟されることです。正しく物事を見て、私たちが生きる本当の意味や目的がはっきり分かれば、こういう牢屋から解放れるのではないかと思います。

ある人がいました。この人はいつも悲観的で、いつも自分のことを「私は不幸だ。」「私は何をしてもいつも負ける。」「私にはできることはない。」と否定的に見ていました。自己否定感があまりにも強くて自分でも耐えられなくなり、精神科の病院を受診しました。診察を終えた医師は、空瓶と二つの薬の包みを処方しました。そして、「あなたは、この空瓶に二つの薬のうちどちらか一つを入れて飲まなければなりません。一つの紙に包まれているのは毒薬です。もう一つはビタミン剤、生き生きさせる薬が入っています。あなたならば、どちらを選びますか？」と聞きました。彼は「それはもう考えるまでもありません。当然、毒は選ばないでビタミン剤を選びます。」と答えました。すると医師は「しかし、あなたの人生を振り返ってみてください。自分という空瓶に今まであなたが入れてきたものは何でしょうか。あなたは、常識でわかることなのに、いつも毒を自分の中に注いできました。少し肯定的に、希望を持って生きようとするれば、あなたは救われます。今、不幸だと思うのは、100パーセントあなたのせいです。自分がそのようにしてしまったことに気づいてください。」と言いました。

考えてみればそのとおりです。皆様と私、そして全ての人間にとって、本当にこの世が美しく見えるか、この世が汚く見えるか、それはやはり自分がどのような心持ちでいるかによって全然変わるのではないのでしょうか。

今日の福音(ルカ 18:9-14)のファリサイ派の人々の祈りの内容を考えてみますと、間違えたことは一つもありません。「守るべき神様の掟を全部守りました。」そして「感謝致します。」という祈りでした。大きい声で祈ったのではなくて、心で祈ったと書かれています。教会は、このような態度で祈るように教えています。「このように祈りましょう。このように生きましょう。」と言っています。しかし、イエス様に叱られました。何が抜けていたのでしょうか。なぜイエス様に叱られたのでしょうか。それは、ファリサイ派の人々には先ほど申し上げた六つの牢屋の要素が全部入っているからです。イエス様は、「形を守るより中身を守りなさい。」とおっしゃいました。そして何よりも、徴税人が

見せた「私を憐れんでください。」というへりくだる心がなかったのです。

やはり私たちのイエス様は恰好いいです。本当に恰好いいです。本当に中身をしっかり見通しています。私たちも、顔を見るのではなく中身を見ようとする、中身を満たそうと努力することが何よりも信仰的ではないかと思ってみました。

頑張りましょう。

ありがとうございました。